

2012 年度厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金報告書

大黒島・厚岸沿岸域におけるゼニガタアザラシの餌（魚類・タコ・イカ）の現存量推定に関する研究

京都大学霊長類研究所・シーライオンズクラブ 和田一雄

1960年代に集中して猟獲されたゼニガタアザラシ（ゼニガタと省略）の激減に注意を喚起した伊藤徹魯・内藤靖彦・新妻昭夫の3氏の呼びかけを受けて、海獣談話会は1973年からこの種の保護活動を開始して、1974年5月には道東海域で219頭、大黒島では34頭にまで減少したことを明らかにした。その後、毛皮の需要も弱くなり、猟獲はなくなってゼニガタの個体数は順調に回復してきた。大黒島では、2010年の換毛期には204頭に増加した。それにつれて、大黒島でも襟裳岬でもゼニガタの個体数増加に伴う秋サケ定置網のサケ被害の増加が叫ばれるようになった。その際、周辺海域の餌になる魚類の現存量がゼニガタの餌需要を支えきれずにいるのかどうか、支えきれなくなりサケにまで手を出すのかどうか、具体的な調査は行われていない。

ゼニガタの餌（表1）を見ると、ミズダコが圧倒的に多い、あとはカジカ科、タウエガジ科、カレイ科、フサカサゴ科、タラ科、に属する底棲魚が圧倒的に多い。回遊性の魚類3種と表層一中層性の魚類3種がみられるだけなので、これら6種はたまたま見つかって摂食しただけであると思われる。底棲といっても、底層から岩礁、砂底、砂礫底などに密着して生息する魚類を意味する。これら底棲魚の生態、資源管理などの研究はほとんど行われていないのが現状である。そこで、我々は、動きの鈍い底棲魚の直接観察による定量的調査を試みることにした。わがグループには熟練の潜水士が多いので、その特性を生かせると考えたからである。

調査場所としては、ゼニガタが多く棲み、あまり深くなく、潮流もそれほど急でない場所として、大黒島周辺を選んだ。時期としては、漁業活動に差しさわりのない漁が比較的行われないう6、7月が適当であろうと考えた。そこで、2012年6月15日を予備調査として、未知の試みへの手探りを行うことにした。7月11・12日はそれを本格的に行う本調査日とした。あらかじめ、6月14日には厚岸漁協に出向き、われわれの調査目的を話して、調査場所などについて了解を求めた。現地に向かうために、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所の協力を頂き、その調査船に便乗した。

予備調査（6月15日）

7.45am 厚岸実験所の調査船「うみあいさ」で出発。8.07am-9.20am 大黒島厚岸湾の内側、水深12m付近で100mラインを2本引き、潜水士3人で潜水調査を行った。参加した潜水士は藤田尚夫、矢野達也、斉藤真人、横山一徳の4人であった。表面水温12℃、透明度1m、かなりの種類の魚は目視する前に逃げていた。9.30am-10.10am 大黒島を一周して、海況、

ゼニガタの上陸数を目視観察した。午後、厚岸湾沿岸で行われている漁業の様子を、各漁家を訪ねて一戸ずつ聞き込みを行った。

本調査（7月11日）

8.00am 船で出発、途中無数の旗が海中に立っている。旗の間にロープ、あるいは網を張り巡らして、ちぎれたコンブを回収しており、コンブ収穫の最盛期のようだ。大黒島内湾側に100mラインを深度3m,5m,7mに3本はる。潜水士2人はラインに沿って両側を目視、とビデオ撮影を行って進む。1人は定点でそれを待つ。透明度3mだが、魚は3mよりも離れたところで逃げ出す個体が多くて、計量が困難であった。参加した潜水士は藤田尚夫、郡山尚紀、福島由華里の3人であった。観察できた魚類を列記する。

1)イカナゴ（イカナゴ科）：砂底に群れていることが多いが、体長1.5cmの仔魚の群れが高密度に見られた。

2)タウエガジ（タウエガジ科）：体長約35cmのものが岩場に稀に見られた。

3)オキカズナギ（ゲンゲ科）：底層のコンブの中に棲む。体長約8-10cmのものが4-5匹の群れを作り、100mライン中に2-3群見られた。

4)ムロランギンボ（タウエガジ科）：体長約30cmのものが、稀に岩場に見られた。

5)クロガシラガレイ（カレイ科）：体長約15cmのものが岩場に稀に見られた。

無脊椎動物も5種観察された。

1)ホッケイエビ：体長約15cmのものが岩場に稀に見られた。

2)エビの1種、ワレカラ：体長約1.5cmの仔魚がコンブの中に群れており、100mライン中に4-5群見られた。

3)クリガニ：甲羅サイズ約8cmのものが岩陰に稀に見られた。

4)モクズガニ：大量に生息していた（正確に計量していない）。

5)エゾバフンウニ：直径約10cmのものが岩の上に大量に生息していた。

これら種類の中から、タウエガジ、オキカズナギ、ワレカラの写真を提示した。

考察

今回選んだ時期が、コンブ漁の最盛期にぶつかったため、透明度が1-3mと不良であったが、ある程度の観察は行われた。コンブ漁が終わる10月以降であれば、透明度がよくなると思われるので、次回はそのような時期を選べば底棲魚の計量は十分に可能であると思われる。その意味で今回の調査は将来の調査に見通しを付けることができた。

謝辞

今回の調査を行うにあたり、調査費援助をしてくださった厚岸町、厚岸湾内での移動に便宜を図ってくださった北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸実験所に謝意を表す。また、厚岸湾内の調査に理解を示された厚岸漁協にも深謝する。

表 1 ゼニガタ・ゴマフアザラシの胃から得られた餌生物

種類	科	餌生物名		生活形態*				胃の出現程度**				
		属	種	表中層	底層	III	IV	ゼニガタ	ゴマフ			
				I	II							
頭足類	八腕類		ミズダコ			0		+	+			
	十腕類		イカ sp.		0				(tr)			
魚類	カジカ科	ヨコスジカジカ	ヨコスジカジカ			0		+				
			ナメヨコスジカジカ			0		+				
			オニカジカ	オニカジカ			0		+			
			ケムシカジカ	ケムシカジカ			0		+			
			ヤギシリカジカ	ヤギシリカジカ			0		+			
			ツマグロカジカ	チカメカジカ			0		+	+		
				ツマグロカジカ			0			+		
				キンカジカ	キンカジカ			0		tr	tr	
					オキヒメカジカ			0		tr		
				イソバテング	イソバテング			0			tr	
					カジカ科 sp			0		(+)	(+)	
			タウエガジ科	タウエガジ	タウエガジ	タウエガジ			0		+	
					ナガツカ			0		+		
	ヌイメガジ	ヌイメガジ					0		tr			
	ウナギガジ	ウナギガジ					0		+	+		
	オキカズナギ	ムロランギンポ					0		+	+		
	フサギンポ	フサギンポ					0		+			
		タウエガジ科 sp					0		tr			
										0	+	+
	カレイ科	マコガレイ	クロガシラカレイ					0	+	+		
	アイナメ科	アイナメ	ウサギアイナメ			0		+	+			
			エゾアイナメ			0		+				
			ホッケ	ホッケ			0		+			
			アイナメ科 sp			0		(+)	(+)			
	フサカサゴ科	メバル	エゾメバル			0		+	+			
			フサカサゴ科 sp			0		(+)				
	クサウオ科	クサウオ	エゾクサウオ			0		+	+			
チゴダラ科	チゴダラ	チゴダラ			0		tr					
タラ科	コマイ	コマイ			0		+	+				
		スケトウダラ	スケトウダラ			0		+	+			
サケ科	サケ	サケ		0			+	tr				
キュウリウオ科	キュウリウオ	キュウリウオ	キュウリウオ		0			+				
		ワカサギ	チカ		0			+				
			キュウリウオ科 sp		0			(+)				
カタクチイワシ科	カタクチイワシ	カタクチイワシ	0				tr					
ニシン科	マイワシ	マイワシ	0				+	+				
イカナゴ科	イカナゴ	イカナゴ					0	+				
サンマ科	サンマ	サンマ	0					+				
サバ科	サバ	サバ	0					+				

* : I 回遊性表層魚、II 沿岸の表—中層を分布の中心とする魚、III 底層を分布の中心とする魚や岩礁性の魚、IV 砂底や砂礫底に生息する魚

** : + 10g以上の獣猟で出現した項目、tr 10g以下で出現した項目、() カッコ付きは類、科までの同定を示す (中岡ら、1986)